

2022年 6 月26日 礼拝メッセージ

「本当に価値のあるもの」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 16 章 16-24 節

一週間前は近畿地方も梅雨入りして、いよいよ雨の季節ですね、と口にしていたのですが、天候は一転して、真夏のような猛暑日の一週間となりました。急な気候の変化に体がついていかずに、しんどい思いをされている方も多いのではないのでしょうか。

先日 6 月 23 日は「沖縄慰霊の日」でした。沖縄戦で失われた約 24 万人の沖縄の人々を偲び追悼する日でした。続く広島と長崎の原爆被害でもそうでしたが、1945 年に敗戦を迎えた際、誰もがこのような戦争を二度と繰り返すまいと誓ったのではなかったでしょうか。しかし、それから 77 年経った今、日本の右翼政党では、ロシアのウクライナ侵攻を口実にして、防衛予算の倍増が訴えられています。本当に大切なもの、価値のあるもの、守るべきものは何なのか。沖縄の有名な言葉で言えば、「命^{ぬち}どう宝(命こそ宝)」ではないのでしょうか。自衛隊も入隊希望者が集まらず、定員割れと隊員の高齢化が進んでいる中、高額な武器を購入しても使える人がいない状況です。さらにロシア軍の戦車が、ウクライナ軍が操るトルコ製のドローンで破壊されているという話を聞きますと、もはや戦争のあり方自体が大きく変化してきています。そもそも何千発もの核兵器を持ちながら、国家間で戦争をすること自体が世界破滅への道でしかありません。

先の戦争を振り返ってみても、軍隊は国民を守りません。実際に中国大陸でも沖縄でも、犠牲になったのは一般人たちでした。軍隊が守るのは国民ではなく、「国体」という国家の対面、面子でしかありません。今、防衛予算を増やしたところで、円安がこれだけ進行していますから、アメリカから購入できる武器の量が倍増するわけではありません。むしろ、これまで通りに武器を買い続けることが出来るように、憲法の改正も併せて、アメリカからの圧力に従っている。つまり、何が大事かと言えば、人々の命ではなく、むしろ命を壊すことを目的とする軍需産業との利権関係こそが大事だというわけです。何ともおかしな話です。

今は来月 10 日の参議院議員選挙に向けての選挙活動が行われている最中ですが、「国民の生活を守る」と言いつつ、自分たちの利権と立場を守ることだけを目指している政党も少なくありません。福島第一原子力発電所の核事故を経ても尚、未だに平然と「原発再稼働」を提唱できているのは、残念ながら「正しい判断が出来なくなっているから」だと言えぬのではないかと思います。私たちが守るべきものは何か。短期的な目の前の利害だけでなく、未来の世代にバトンを渡していくにあたって、何を大切にしているのか。私たちの日々の生活においても、そのことが問われています。

さて今回の聖書のお話は、パウロたちが船に乗ってエーゲ海を渡り、フィリピの町に行った時の出来事でした（使徒 16:11）。フィリピの町はマケドニア州にあった大きなローマの植民都市だったようです（12）。経済的に発展した大きな都市には、昔も経済格差があり、搾取や差別と無関係ではいられませんでした。このフィリピの町にも経済的に豊かな人々は多くいましたが、そうではない人々もまた多くいたことが分かります。16 節には「私たちは、祈りの場に行く途中」とあります。他の箇所では、人々は「会堂」に集まってお祈りしたり、聖書の言葉を聞いたりしていましたが、ここではあえて「祈りの場」と書かれています。それは直前の 13 節に書かれていますが、このフィリピの町での集会は、町の門の外の川岸、つまり屋外の河原で行われていました。それは町の門の中、つまり城壁に囲まれた町の中には、人々が集まることのできる場所を用意することが出来なかったということか、もしくはそこに出入りすることが許されない仲間たちがいたからなのだろうと考えられます。

そんな人々の祈りの集い、すなわちフィリピの町の中でも、とりわけ弱く小さくされていた者たちの祈りの集いに、パウロたちも一緒に加わりイエス・キリストの福音を宣べ伝えていました。そんな折、パウロたちは占いの霊に憑りつかれている一人の女性に出会います。「占い」と訳されていますが、何か道具を使って占いをするというのではなく、いわゆる「神がかり」の状態になって、「ご神託」、神からのお告げを伝えるというものだったようです。彼女はそれで商売をしていたようですが、この女性、女奴隷には主人がいました。しかも、それも一人ではありませんでした。19 節には「この女の主人たちは」ときちんと書いてあります。つまり、この一人の

女性には何人もの主人たちがいて、この女奴隷を食い物にして搾取していたという事です。

そんな彼女はパウロたちの後ろに付いてきて、周囲の人たちに対して「この人たちは、いと高き神の僕^{しもべ}で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」(17)と何日間も叫び続けました。この言葉は一読するとパウロたちの宣教活動を手伝っているようですが、むしろ言い換えると、「皆さんを救うことの出来るあなたたち、パウロさんたちは、この私を救うことも出来るんじゃないですか。たくさん主人から、よってたかって搾り取られている私をどうか助けてください」という切実な訴えだったのではないかと思います。18 節では「パウロはたまりかねて」とありますが、幾日にもわたって彼女からそのように訴えかけられて、パウロはとうとうたまりかねて、その占いの霊を追い出しました。

その結果は、どうなったでしょうか。19 節以降ですが、「この女の主人たちは、金儲けの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、広場の役人の所へ引き立てて行」きました。そしてパウロたちは町の治安を乱している、風紀を乱し、ルール違反もしている、と言って訴えられて、責められ、鞭打たれ、牢屋に投獄されました。なお、聖書には記されていませんが、この占いの霊を追い出してもらった当の女性は、パウロたちよりも更にひどい扱い、虐待を、この搾取者たちから受けたのではないかということが想像出来ます。「昨日まではご神託を語り、金儲けができる金蔓^{かねづる}だったのに、それが出来なくなったお前なんて、全く役立たずじゃないか。何を勝手なことをしてくれたんだ」……。おそらく彼女自身も、またパウロたちも、そうなるだろうことも、容易に予想していたのではないのでしょうか。彼女にしてみたら、占いの霊による働きをしていたら、とりあえず食べる物と着る物と寝る所は与えられる、今日の暮らしは確保される。それこそ「お金はピンハネされるけれども、叩かれたり殴られたりすることはない」という状態だったかもしれません。しかし、それでも彼女はそこから立ち上がり、一步を踏み出し、解放されることを望みました。そしてパウロもまた何日間も付きまとわれて根負けして、自分たちが嫌がらせを受けて、迫害されることを覚悟の上で、彼女から占いの霊を追い出しました。そこにあったのは、上辺の体裁、体面を繕い、立場を守ることにこだわり、目の前の暮らしを続けることだけに固執するのではなく、たとえそれら全てが崩れ去ったとしても、もっともっと根本的に、自分自身の命、魂が束縛から解放され

て、神様が創られたままに自由に生きられるようになるためには、どうしたらよいか、ということをも最優先して考えた、ということだったのではないかと思います。

今日、ご一緒に歌った賛美歌には、「光と闇の戦い」「正義と不義の戦い」や「悪魔の誘惑」という言葉がありましたし、また「罪の中に死んでいる」というような言葉もありました。それらの言葉は、現代社会を生活している私たちのどのような部分、どのような側面を表現していると考えられるでしょうか。私たちが今、日々の暮らしの中で当たり前に従っている考え方や、大切にしている価値観とは何でしょうか。実はそれらは主体的に選択しているのではなく、一つの立場に恣意的に束縛されて、がんじがらめにされて、逃げ出せなくなっているということもあるかもしれません。例えば、「お金が無ければ生きていけない」、また「学校に行かなければ生きていけない」……。本当にそうでしょうか。それらは社会の多数派の人々や、利権を握った一部の搾取者に都合の良い価値観が、一方的に植え付けられているだけなのではないでしょうか。

いや、人が人を意識的に支配し、搾取しているだけならば、まだ考え直し変わってもらう余地もあるかもしれません。ですが、もっと恐ろしいのは、支配し搾取する側も、自分の意志とは無関係に、人を支配し搾取せずにはいられないという構造の中に置かれてしまっている場合です。例えば、近代資本主義社会の中では、お金を持っている資本家たちとて、単に労働者たちを搾取しているというだけではなく、彼らもまたお金それ自体に支配され、魂を搾取され、休むことなく走らされ続けていると言えるのではないかと思います。

「本当はこんなことしたくない。自分の本心ではないけれど、立場上こうするより仕方なかった」……。私たちの身の回りでは、よく耳にする表現かもしれませんが、これが現代社会における「悪魔」や「罪」、「命を命として生きられなくさせているもの」と言えるのではないのでしょうか。

「あなたは何に従って生きていますか」「何を大切にしていますか」「本当に価値のあるものは何ですか」……。本物そっくりの偽物や、すぐに効果が実感できるけれども、深刻な副作用が伴うものなど、「本物」や「正解」が見つげにくい現代です。そのような時代の中ですが、私たちはイエス・キリストの言葉と振る舞いを道しるべとしながら、「本当に価値のあるもの」を求め続ける歩みを進めて参ります。